

人生の転機

岡崎 伸太郎

「人生には3度転機があるんだよ」。高校を卒業する時、担任の辻先生にそう言われた。その最初の転機が訪れたのは大学2年の時。友人とバンドを組み音楽三昧の生活をしていた頃、日本料理屋をしていた父が脳貧血で倒れた。多額の借金もあり人を雇えるような状態ではない。しかも一人っ子。自分が店を仕切るしかない、と包丁を握り板前となった。最初は秋刀魚の塩焼きを出したら左右が反対、なんて失敗もしたが、1年もするうちに仕込みと調理の一通りをこなせるようになった。父の回復後も仕事は続け、大学も卒業して本格的に家業を継ぐことになった。深夜営業もやっていたから就寝は午前4時。休日は月に2日。近所には場外馬券売場もあって週末には客でごったがいた。

そんなある日、店の調理場からテレビを眺めていると大掛かりなコンサートの映像が映し出された。アフリカの貧困を救うため欧米のバンドが総結集したライブ・エイド。世界は果てしなく広く、様々な国々で様々な人々が生きている。自分の心の変化をどう説明してよいかわからないが、人生に2度目の転機が訪れているのを感じた。外国へ行って世界が見たい。これまでできなかった何かを勉強したい。そう思い出すと決意は早く、さっそく本を買い英語を勉強しはじめた。単語を板場の壁に張り、開店前の仕込をしているときに声を出して読む。それから1年。資金もため、1986年の9月にシアトルへ旅立った。店の方は借金も完済、改築もして板前を雇うよう手配した。

それからの3年間、片田舎の州立大学でひたすら勉学に没頭した。最初の3ヶ月は付属の語学学校で英語を履修し、その後は経営学大学院修士課程に入学。生活費を稼ぐためティーチングアシスタントとなって授業を受け持つ一方、一人暮らしの老人の家に住み込み、食事の世話をして家賃を浮かせた。1989年の12月に修士課程を修了、帰国して米銀に就職。両親も隠居させ、店も売って杉並に自宅を買った。

3度目の転機が訪れたのは1998年。とあることから知り合ったスペイン人技術者とバルセロナで共同事務所を作る話が持ち上がった。金融の知識、さらに経営者としての経験と米国での生活。もう40に手が届くという年齢で、英語圏とは異なる文化に触れるならいましかない。スペインへ渡った後は、会社を経営する一方、以前からの夢だった博士課程に入学し経営学を学び直すことにした。2002年に博論を提出、学位を取ると大学で教え始めた。結局両親もこちらへ呼び寄せることになり、父も自宅で82歳の天寿をまっとうした。

とてもここには書きつくせないが、この30年間にどれほどの人々と出会い、いくつの分れ道を選んだことだろう。人生のゴールはまだ見えそうにない。